



たじひのだより

松原市文化財情報誌 No.5

発掘調査レポート ①

いけうち



池内遺跡などで大きな成果



—(財)大阪府文化財センター実施の発掘調査から—

市域北部の三宅西、天美東、天美北地域では、現在大規模な発掘調査が進行中です。この周辺地域の歴史景観はあまりよくわかっていませんでしたが、現在行われている調査によって新たな事実が次々と発見されています。今回はこの発掘調査を実際に現場で指揮されている(財)大阪府文化財センター技師の平田洋司さんと専門調査員の永田由香さんに紹介していただきます。

1. はじめに

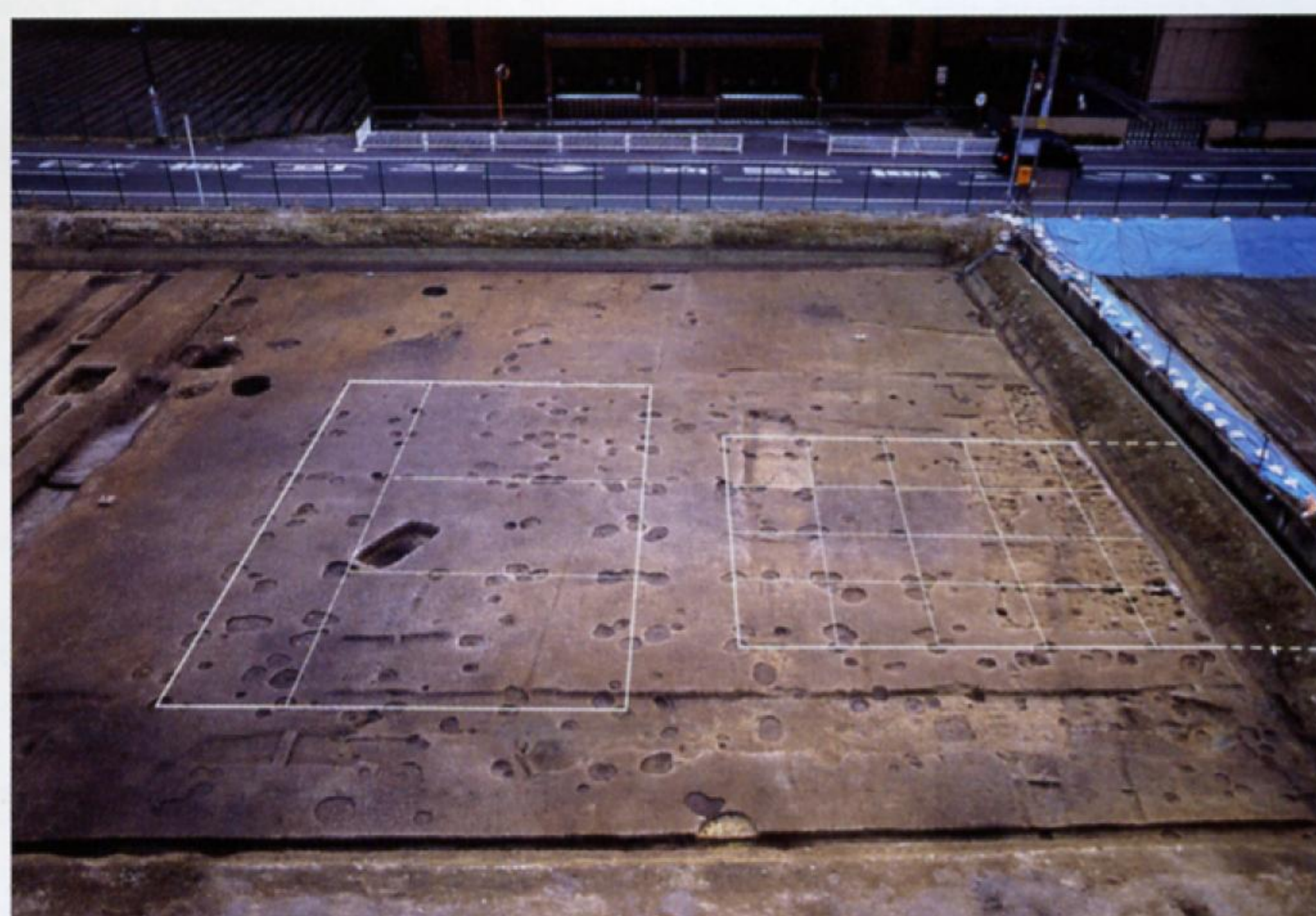
調査地は全体で東西1.5kmにも及び、東側が三宅西遺跡、西側が池内遺跡に含まれています。平成17年3月より調査を開始した三宅西遺跡では、これまで縄文時代の土器や弥生時代の住居・墓、古墳時代の集落跡など重要な発見が相次いでいます。少し遅れて始まった池内遺跡でも調査開始早々に大きな成果をあげることができました。あぜ状の高まりや溝によって周囲を区画された平安時代中頃(10~11世紀、約1000年前)の屋敷地跡が発見されたのです。

2. 屋敷地とその周辺

屋敷地跡内からは、柱を建てるために掘った穴が密集して見つかり、この柱穴の組み合わせから建物が10棟ほどあったと考えられます。ただし、すべてが同時に建っていたのではなく何度か建て替えられていたようです。このうち屋敷地内の東側で発見された南北方向に長い建物とそれと隣あった東西方向に長い建物はほかと比べて特別に大きなものです。南北方向に長い建物は、南北約14m・東西約9m(約130㎡)、東西方向に長い建物は、一部未調査部分があるため東西は11m以上としかわかりませんが南北は約9mあります。この2棟は柱の並び方がそろっていることからつながっていた可能性もあります。おそらくこの屋敷地内で中心的な建物だったのでしょう。



▲手前が屋敷地、屋敷境を経て奥が耕作域



▲大型の掘立柱建物

屋敷地内の西側にも建物がたくさん発見されました。そのまわりにはごみ捨て穴や井戸などもあり、炊事場や倉庫、使用人たちの住居など、大型の建物に付属する建物であったと思われます。

現在の調査では屋敷地の南北境界はわかりませんが、東西の境界は確認することができました。東西の境界には共にあぜ状の高まりが築かれていて、東側の境界のものは幅約1.8m・高さ約0.3mで、さらにその両側に溝が掘られていました。おそらくこのあぜ状の高まりは道としても使われていたと思われます。

東側の境界に掘られた2条の溝のうち内側の溝からは大量の土師器、黒色土器などが出土しました。皿や碗など日常生活で用いる食器類がほとんどを占め、屋敷地内で使われていた食器であったと思われます。ただ、皿や碗には完全な形のものも多くあり、壊れて使えなくなったから捨てたものばかりとはいえないようです。

屋敷地外の東側では、耕作の跡と思われる南北方向の溝がいくつも発見されました。掘立柱建物も数棟見られますが、屋敷地内のものと比べると小規模で柱穴も小さいことから農作業に係わる小屋と考えられます。おそらく屋敷地外の周囲には水田や畑が広がっていたのでしょう。

3. 屋敷地と条里制

古代の土地利用を考えるうえで重要なものに条里制という制度があります。土地や税を管理しやすくするため、土地を方眼状に区画し、番号をつける制度です。区画された方形の土地は「坪」と呼ばれます。条里制の始まりについては諸説があり、また地域によっても異なるともされています。現在の松原市域には方眼状の水田区画が広く見られますが、これはその条里制を受け継いだものと考えられています。

さて今回発見した屋敷地跡ですが、東側境界がちょうど坪の一辺を二分する位置にあたるので、屋敷地の区画は条里制とは無縁ではないようです。調査地周辺ではすでに平安時代中頃には条里制がなされていたのでしょう。

4. 屋敷地に住んでいた人

屋敷地に住んでいたのはいったいどんな人だったのでしょうか。建物がかなり大きく、広い屋敷地をもっていることから、一般の人よりも地位の高かったことは間違いなしでしょう。ただ、見つかった多くの品々は日常的な食器類などで、役所跡などで見られるような木簡（木の札）や墨書土器などの文字資料も現在のところ見つかりません。そうすると広い耕作地がまわりにあることから考えて、この屋敷地に住んでいたのは、この地域の水田開発や管理に中心的な役割を果たした有力な農民であった可能性が高いのではないのでしょうか。



▲井戸（木板を方形に組んだ井筒が見えます）

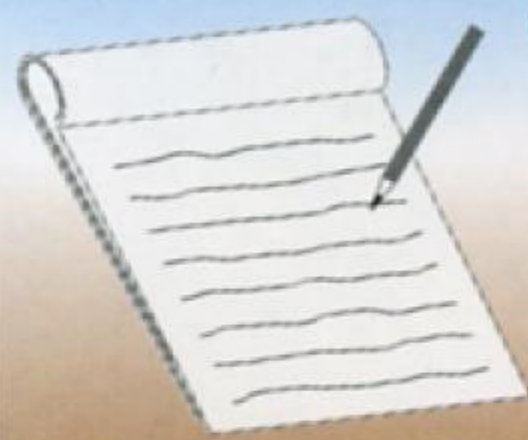


▲屋敷境の溝とあぜ状の高まり
(写真左が屋敷地、右が耕作域)



▲土器がたくさん捨てられていた屋敷境の溝

発掘調査レポート②



古墳時代前期(4世紀)の集落跡

後期(6世紀)には水田化

あ お 阿保遺跡



阿保3丁目の共同住宅
建設工事に先立って発
掘調査を行い、古墳時
代前期の集落跡と後期
の水田跡を発見しまし
た。集落跡には掘立柱
建物や井戸があって、
井戸からは当時使用さ
れた甕や壺などがほぼ完全な状態で出土しました。また後期の水田跡では、用水路や排水用の小溝、人や牛が歩いた足跡、鋤で耕したあとなどが発見されました。今回の調査では、この地域が、古墳時代に集落から水田へと変わるようすを確認することができました。



市史編さんレポート①



ふすま

こもんじょ

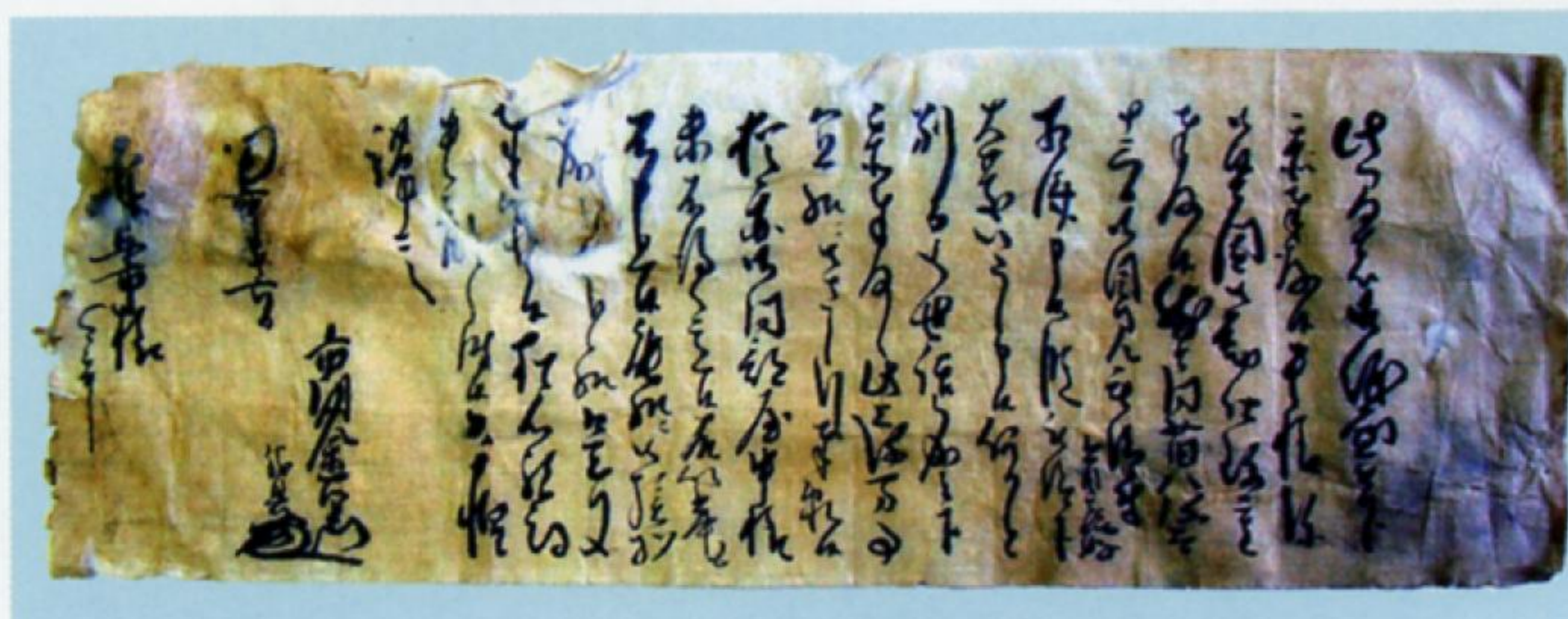
襖の中から古文書発見!!

—下張り文書の調査—



襖は、障子のような格子状の木の枠の上に何層も紙が張り重ねられて作られています。表面のきれいな襖紙以外の下張りに使用する紙は、江戸時代や明治時代などでは、いらなくなった帳面や手紙などがよく利用されていました。こういった襖の下張りとして発見される古文書は当時の人々が日常的に使用していらなくなったものばかりなので、政治的な公文書などとはちがい、より一層庶民の生活に密着した記事が読み取られることが多く、庶民の歴史を解明するうえで大変貴重な資料となります。またまれに著名な人物のことを記した文書が含まれていて歴史的な大発見となることもあります。

現在調査中の下張り文書は、江戸時代の手紙をはじめ商売の受領書や代金書上などが含まれているようです。



市史編さんレポート②

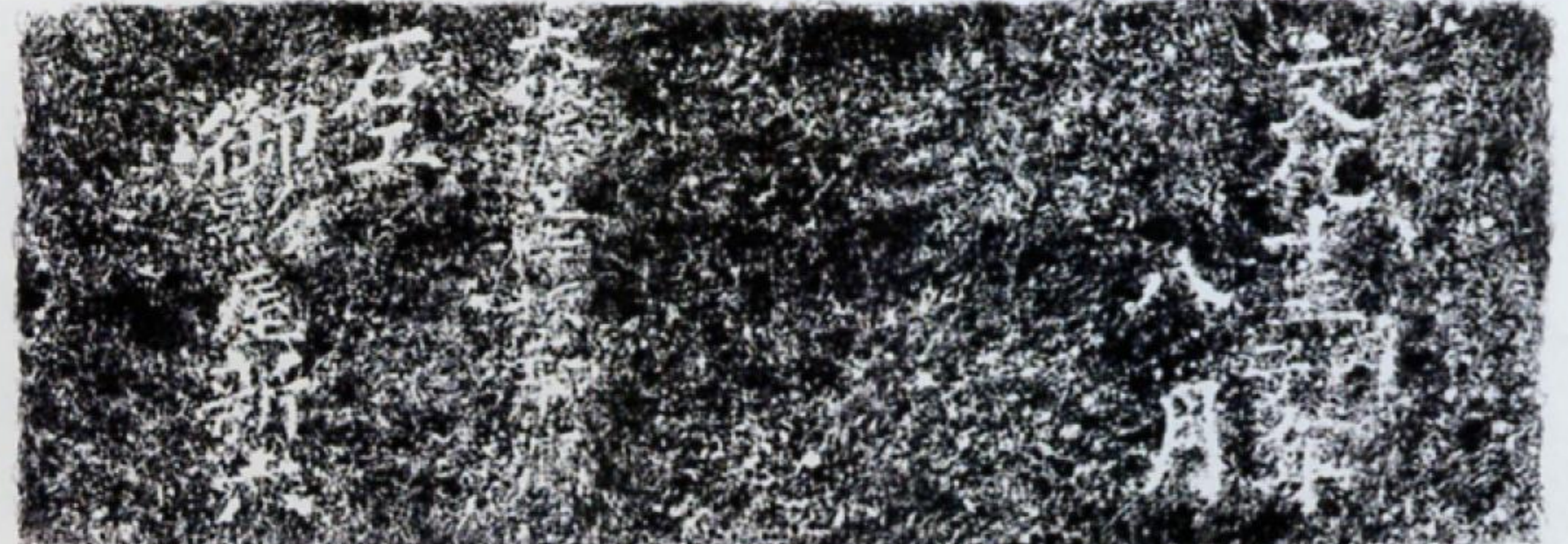


まさ い でん 正井殿のこま犬



—刻まれた文字の解読・岡3丁目所在—

江戸時代から正井殿を守ってきたこま犬が老朽化して倒壊のおそれがでてきたため、地域の方々によって新しいものと取り替えられました。せめて記録だけでも残しておきたいという地域の方々の依頼がありましたので、こま犬の台石に刻まれた文字の拓本を採取し、地域で保存していただくことになりました。



この刻まれた文字により、このこま犬は文化13年（1816）8月に、岡と立部の氏子により当社に寄進されたものであることがわかりました。また「大坂源正寺坂の下の濱」というところに住んでいた「御影屋新六」という石工によって製作されたこともわかりました。なお「大坂」は「大阪」、「源正寺坂」は「源聖寺坂」のことで、現在も大阪市天王寺区下寺町にあって大阪七坂に数えられる情緒ある坂道です。

中学生 職業体験 学習

平成17年7月5・6日に第三中学校生徒が、11月10・11日に第四中学校生徒が、それぞれ職業体験にやってきました。発掘調査で出土した土器の水洗いや発掘調査現場で土を掘ったり測量をしたりする仕事を体験してもらいました。汗や泥にまみれての仕事でしたが、彼らにとっては貴重な経験になったことでしょう。



◎松原市内の文化財についてお知りになりたい方へ◎

【ホームページ】

<http://www.city.matsubara.osaka.jp/ky-syakai/bunkazai/toppage/sisi-index.html>

【文化財の展示】

ふるさとびあプラザ1F・郷土資料館

（財団法人松原市文化情報振興事業団） 大阪府松原市上田7丁目11番19号

電話 072-336-6800

（本庁5F・総務部人権文化室）

大阪府松原市阿保1丁目1番1号

電話 072-334-1550（代）

【発掘届出・遺跡範囲確認・建築確認申請時の合議などの受付窓口】

松原市役所5F・教育委員会地域教育振興課

大阪府松原市阿保1丁目1番1号

電話 072-334-1550（代）

FAX 072-332-7720

【文化財に関する各種相談・手続き・調査、図書の販売、その他】

教育委員会地域教育振興課市史文化財係阿保事務所

大阪府松原市阿保5丁目21番8号

電話 072-336-4448

FAX 072-336-4001